

福島市松川地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 水稲+大豆による大規模稲作経営体として、経営の安定を目指す。
- 大豆の単位収量向上を目指す。
(約120kg/10a (R4) →150kg/10a (R7))
- 収量及び加工適性に優れた「里のほほえみ」の導入を図る。



2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】水稲：44.0ha、大豆：8.2ha (R3)
- 【主な大豆栽培品種】
里のほほえみ：0.0ha、タチナガハ：5.0ha、その他：3.2ha 計8.2ha (R3)
里のほほえみ：3.2ha、タチナガハ：2.4ha、その他：3.7ha 計9.3ha (R6)



3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<畑作物生産振興支援チームの設置>

- 福島市、川俣町、JA、地域農業再生協議会、普及部による支援チームを設置し、推進体制を構築する。

<実証ほの設置および現地指導会の開催>

- 小畝立て同時播種技術による生育初期の湿害を回避するとともに、現在、形質の劣化が懸念される「タチナガハ」（慣行）から「里のほほえみ」への切り替えに取り組む。
- 加工適性調査を実施し、「里のほほえみ」の加工適性について確認する。
- 実証ほで得られた結果をもとに現地指導会を開催し、技術や情報を管内全域に波及する。



4 取組成果

<団地化面積が増加>

- 関係機関と定期的に情報共有を行いながら、連携して大豆栽培を推進した結果、団地化面積が増加した。
(団地化面積：10.6ha (R3) →21.0ha (R6))

<作付け面積の拡大>

- 実証ほを活用し現地指導会を開催するなど、「里のほほえみ」への作付け転換を推進した結果、モデル地区含め管内の「里のほほえみ」作付け面積が増加した。
(作付け面積：0.0ha (R3) → 8.5ha (R6))

※単収は高温の影響により低収

(120kg/10a (R4) →31kg/10a (R6))



5 課題（7年度のポイント）

- 高温年において、「タチナガハ」は青立ちが発生しやすい傾向がみられており、引き続き「里のほほえみ」への作付け転換を図っていく必要がある。
- 開花期に高温乾燥が予想される場合には、畦間灌水による着莢不良・青立ち回避を指導する。
- 高温の影響に加えて、連作による地力の低下が低収の要因となっている可能性があるため、ブロックローテーションの実施や地力向上に資する資材の効果を検証する。